

「個人研究発表」を振り返って

研究交流集会の最初の分科会として、3月20日の午前10時15分から12時まで「個人研究発表」の時間帯が設定されました。その司会役を任された立場から、私的な感想を記しておきます。

発表者とテーマは発表順に、倉橋弘美氏「プログラミング教育を通じた地域創生と知の形成」、紅谷正勝氏「飛騨高山大学〈仮称〉設立準備概観」、小宮弘信氏「ウィリアム・モリスのレッサーアート論」で、各35分間の持ち時間でした。

一人目の倉橋氏は、学生時代に教員免許を取得し、大手シンクタンクでのプログラマーやSE、コンピュータ学校での講師などの経験を積み、2004年に企業等のIT化を支援するアペイロンを設立、2018年からはプログラミング教育も始められた。現在京都女子大学で講師もされています。氏の発表は、パソコンの黎明期からICTとともに歩まれた貴重な体験に基づくもので、ICT教育30年の変遷、啓蒙思想やプラグマティズムと教育、ヘラクレイトスの「知」、Society5の目指すもの、地域創生にかかわった事例など、極めて多岐にわたり、かつ奥の深い内容であった。

コロナ禍の中で急速なデジタル化が求められるいま、市民にわかり易く解説する能力は実に貴重であり、パソコン音痴の私でも時間を取ってぜひ学びたいとの思いがつのり、市民大学院でのオンライン講座の開講などを提案した次第です。なおアペイロンは、成徳学舎から徒歩約5分の京染会館内にオフィスを構えておられます。

二人目の紅谷氏は、大学不在の飛騨高山地域に大学を創設することを決意され、大きな貢献をされてきた元高校教師です。10年ほど前に、市民大学院での「工芸立国論」に参加されて以来、私が直接関わった交流だけでも、飛騨高山高校の生徒さんの京都での研修会、家族連れでの高山市の訪問、高山市民向け公開講座、京大での研究交流大会への参加などがあり、飛騨高山での大学創設は共通の願望です。

氏の発表内容としては、大学設立に向けての検討委員会の発足、飛騨市との包括協定の締結、通信制の強化とサテライトの全国展開、新たなカリキュラム編成など、2024年の開学に向けての準備が大きく進展していること、また同時に、地域固有の文化資本の継承・研究の重要性、大学設立に係る推進組織内での齟齬、実務の膨大さによる遅延の懸念なども、率直に語られました。

地域力を育むことを使命とする大学の創設は、きわめて重要度の高い喫緊の課題であり、私からも、地元企業と連携し仕事の改善などを研究テーマとする体験型学習、「飛騨の匠」の技と精神を本格的に学べること、サテライトの一つとしての京都を戦略的拠点として重視すること、などによって新設大学の特徴を明確に打ち出すことを提案しています。大事業ですから幾多の困難も生じるでしょうが、氏の持ち前の大調和の精神で、見事に成就される姿が目に見えています。

三人目の小宮氏は、業務系ソフトの開発に永年従事し、宝塚市では文化まちづくりにも積極的に関与されていました。モリス研究の動機をお聞きしたところ、SEの仕事で徹夜の毎日を過ごし、「働くとは何か」を考え続けていた中、2013年ごろから市民大学院との縁があ

り、モリスには喜びのある仕事という考えがあることを学び、2016年から京都橘大学大学院へ通い、修士論文のテーマの一つが「モリスの労働論」であった、との経緯をうかがいました。

今回の研究対象であるモリスのレッサーアート論に関しては、多くの資料・文献や先行研究がある中で、モリス自身が書いたものにこだわり「モリスの真意を探る」ために、モリス所縁の場所をめぐり、貴重資料と直に触れるためにイギリスを訪問されたという。その成果として、芸術が純粹芸術（大芸術）と装飾芸術（小芸術）に分かれた、という従来解釈を超えた新たな見解を明示された。つまり、民衆の生活の中の装飾芸術（Decorative Arts）が Lesser Arts（安価で画一的なもの）と Greater Arts（高価で華美な金持ちのおもちゃ）に切り離されて、芸術が衰退してしまった、とモリスは指摘していること。さらに装飾芸術の本質は、自然との調和や過去との結びつきの美にあり、その効用は、使う喜び・作る喜びにあり「芸術は人間の美への喜びを表現するためのシステム」とモリスは主張していること。このように、モリスの真意としての「レッサーアートのあらずじ」を氏が明示されたことは、芸術や美の理解を深め、今後の社会や産業のあり様にも影響を及ぼす大きな研究成果だと思われまます。

以上のとおり、今回の「個人研究」は三者三様であり、共通テーマなどは設けられていない。しかし、三名に共通するのは、仕事や暮らしを改善するための実践と思考を重ねた、ご労苦の結晶としての発表であった。そして、このような研究発表の機会があることによって、その労苦が共有されて労苦が報われ、喜びにも昇華しうるのだ、という司会者としての気づきもありました。発表者ならびに関係の皆様にご心より感謝申し上げます。

岩田均（市民大学院理事、京都美術工芸大学）